

アイヌ社会の仕組み

アイヌの人々が暮らした村、コタンには絶対権力者というものは存在しませんでした。集落単位で何かを決めなくてはならないとか、全体行事、争いごと



佐賀 彩美 (さが あやみ)

一般社団法人北海道開発技術センター
調査研究部 研究員

北海道出身。北海道大学法学部卒業。モンレー国際大学院(現ミドルベリー国際大学院モンレー校)通訳翻訳学科修士課程修了。通訳案内士。

引き合いに出して論を尽くす博識者でなければなりません。ユニークなのは、この弁論がユーカラの語りのような節つきで語られ、村人たちはそれを

の調停などの世話役として、村長と副村長にあたる補佐役が2名ほどいました。村長はソーオツテナ(総乙名または惣乙名)、その補佐役2名はワキオツテナ(脇乙名)、オツテナ(乙名)またはコンツカイ(小使)、ミンヤケトリ(土産取)と呼ばれました。これらの名称は、松前藩が上意下達のため取り入れた日本の古語で、オツテナは族長、家長を示す乙名おとに由来します。

今日みるアイヌ文化は、日本文化を応用・借用しながら成立させたもので、15-6世紀以後、松前藩が台頭することで、より日本化が進みました。一方、和人とアイヌを意味する蝦夷(えぞ、中世以前はえみし)との昆布わしや鷹たかの羽、陸海獣の毛皮などの交易は奈良、飛鳥時代から行われていました。7世紀半ばには、阿倍比羅夫が蝦夷征伐のため東北を経て北海道まで遠征していることから、アイヌと和人の交流の歴史は遙か昔に遡ると考えるのが自然です。

ここで、前回も簡単に触れたアイヌ社会での紛争解決方法、チャランケ(チャ・(正論を)口に、ランケ・下ろす=正論を主張する)についてもう少し具体的に説明します。コタンでもめ事が発生すると、まずは村長と2名の補佐役が当事者間での話し合いによる和解を促します。それでも折り合いがつかない場合は、裁判—チャランケが行われます。はじめに当事者を擁護する弁護人が本人の代理として言い分を主張し、続いて相手方の代理人が主張を述べ、正当性を競い合います。代理人は雄弁かつ、過去の事例や故事来歴までも

各々縫物などの作業をしながら傍聴し楽しんでいたことです。双方の主張の受け答えは何日も続くこともあり、いかにものんびりとした裁判だったと想像できます。そして、相手の言い分を言い負けせば、皆がその正当性を認めます。十分に弁論が尽くされると、村長と2名の補佐役がチャランケの内容を検討したうえで、長老にお伺いを立て、最終的な結論を出すのです。チャランケの結果には代理人の弁舌の巧みさも大いに影響したため、もめ事がおきると、当事者は弁論能力の高い人を探して代理人を依頼しました。この点で、弁護士の能弁さが結論を大きく左右することがあるといわれる、アメリカ式陪審裁判にそっくりだと思えます。さらに、傍聴人が裁判の結論に異議を申し立てることもできました。

実際にあったことだそうですが、ある人が他の家の道具を借りて壊してしまいました。しかし、貧しいので弁償することができません。このためチャランケとなり、弁償するかわりに当事者が相手の家に行って働くという労役が課されました。ここで一人の老婆から、働き手が他の家に行ってしまったら、残る家族はどのようにして生活の糧を得るのか、という異議申し立てがなされます。結局、この異議は認められ、労役を課された人は家族ごと相手の家に行き義務を果たすということで、一件落ち着いたそうです。個々人の意見が尊重されるところなど、まさに民主主義そのものだという印象を受けた次第です。

藤村 久和 氏 北海学園大学名誉教授 北日本文化研究所代表 アイヌ語地名研究会会長
アイヌ学全般(精神文化・口承文芸・衣食住・民族医療(整体ほか)等)を研究領域とすると共に、アイヌの人々が自然を管理することなく、いかに共存してきたかについて、その思想や哲学を自ら学び・実践している。また、アイヌ民俗文化財調査(北海道教育委員会)に従事し、道内に居住する古老の伝承話の聞き取り作業を行い、その成果が例年報告書として刊行され、資料篇等も随時刊行している。近年は、食育コーディネーターとして北海道の食育計画にも参画する傍ら、國學院大学北海道短期大学部(滝川市)で開催のペカンベ祭で伝統料理を提供している。主な著書:『アイヌの霊の世界』(小学館、1982年)、『アイヌ、神々と生きる人々』(福武書店、1985年)、『アイヌ学の夜明け』(梅原猛氏との共編、小学館、1990年)、『知里真志保フィールドノート(6),(7)』(北海道教育委員会、2007、2008年)、『平成20~29年度アイヌ民俗文化財調査報告書アイヌ民俗技術調査1~9』(北海道教育委員会、2008~2017年)等。

*本稿は、アイヌ語地名研究会会長、藤村久和先生を講師として(一社)北海道開発技術センターが自主事業として実施しているアイヌ文化勉強会の内容を、藤村先生監修の下、筆者が取りまとめたものです。